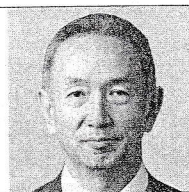


上智大学の曄道佳明学長は、大学には学生が社会に出てからも学び続けられる資質が身に付く「豊かな学びの場」の提供が重要だと指摘する。

創造力高める学部教育



曄道 佳明

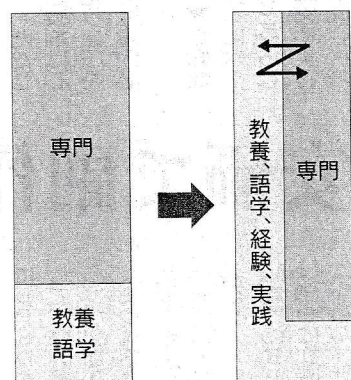
上智大学学長

化の進展など、直面する社会変革の成り行きに対しては、多くの期待と共に懸念も出ている。産業構造や就業様態の変化に対する予測や備えは十分でないように思われるし、企業活動の多様化が求められることは必至であるからだ。

このような変化の激しい時代においては、必然的に創造的な学びの継続が要請される。そこで昨今は社会人の学び直しの議論が盛んであるが、この表現は問題がある。「学び直し」大学での学びが十分でなかったことに對する補完」という意識では、もはや変化の激しい時代に対応できない。

学びの豊かさに対する尺度や解釈は視点によって大きく変わる。ここでは大学での学びが社会の創造力を高めるという成果を豊かさの指標の一つと考へ、特に学部(学士課程)教育の学びを豊かにすることを考へたい。人工知能(AI)やビッグデータによる社会のデジタル化、グローバルを遂行するための知見

大学に 学び続ける基盤



(a) 教養・専門縦置き分断型

(b) 教養・専門有機結合型

やスキルを向上させるための武勇伝(?)もある。けでなく、新しい社会変化に企業や個人が対応するための「学びの継続性」が問われる時代なのだ。

中等教育、高等教育と学びの様態は異なるにせよ、社会人の学びの時間は40年以上に及ぶ。それに対して大学での学士課程はわずか4年間、10分の1に満たない。この認識の下で、学部教育で学生が身に付けるべき本質的な資質は何なのかを考へる必要がある。

残念なことには日本では一部企業は採用にあたって大学での学びには期待しないと伝聞されるし、企業のリーダーが「自分は大学時代には不勉強であった」と吹聴する特有

柔軟な構成比

目的に応じた選択肢

る。

大学での豊かな学びを

問うときに重要なのは、

「教養」「専門」「経験」

の有機結合である。

特に教養については、

「国際通用性」と「智の

生産性」について一考す

る必要がある。国際社会

での活動や交流において

は、専門性を問わず、例

えば時事問題に結び付け

られて取り上げられる歴

史認識や宗教理解、哲学

これらのグローバルリ

スクの多面性などといっ

た教養の具備の必要性を

痛感させられる。

一方で、教養とは物知

りを指すものではない

し、ましてやモバイルフ

ォンにインプットした情

報を指すものでもない。

教養とは発揮すべく咀嚼

せしやくされた智(ち)

を指すのであり、蓄積す

ることと目的を達するも

のではない。

教養とは、社会に対し

て、あるいは職務の上で、

価値を創造する力、デザ

インする力、また自分や

社会を展望する力、とき

にはイノベーションを起

こす力にもなり得る智の

源泉であり、そしてそれ

は国際通用性を有してい

るべきである。

だが、日本の総合大学

における教養教育の位置

づけは、初年次教育的な

意味合いを持ち、縦置き

分断型の配置(図a)に

なっていることが多い。

教養が持つべき国際通

用性、智の生産性を鑑み

れば、高校卒業直後の学

生と社会を目前にした学

生に提供する教養教育は

同レベルで議論されるべ

きではない。専門性のバ

ックグラウンドが築き始

められた時に、その応用

には深い教養と豊かな経

験が必要であることを実

感するプログラムの整備

が必要である(図b)。

現行の学士課程教育の

カリキュラムは、高度な

学術研究者を養成する教

育体系の中の最初の4年

間を切り出したものにす

ぎない。

参考までに、ある文系

学科の科目構成をみてみ

よう。共通科目21%、語

学科目10%、学科科目59

%、他学科科目の算入可

能範囲10%である。

学部を卒業して実社会

に活躍の場を求める学生

と、研究者を目指す大学

院で高度な学術レベルに

求めたい。

では、学士課程における

学びの幅は異なっており、